



## 私が幼児教育を志した頃(22)

津 守 真

### 大 学

一九五三年春、児童心理学者として著名なDr.ジョン・E・アンダーソンの発達心理学上級セミナーに私はいままでもない満足感を感じていた。セミナーは先生の自宅で行われた。先生の家の三階が小さなセミナー室になっていて、書棚に囲まれて大きなテーブルのまわりに毎週七、八人の大学院学生が集まった。夫人がいつもコーヒーを用意して下さった。先生には七人の子どもさんがあり、日々の保育については子どもの自発性を重んじる優しさをもっておられることがすぐに分かった。長男は新進の数



学者として当時すでに知られていた。先生は心理学の側からの当時の進歩主義教育の支え手であった。米国教育協会の一九四六年次報は幼児教育の特集で、巻頭に先生の論文が載っていた。先生は心理学の理論家として学会で定評があり、大学院学生たちからも尊敬されていた。ミネソタ大学にはサバティカルという制度があり、七年に一度休暇が取れるが、その期間は給料も減るので、多勢の子持ちの先生は一度もそれを利用されたことがないというのは学生の間でも有名な話だった。

セミナーでは、毎回当番の学生が心理学の理論を一つ選んで発表し、先生のコメントがある。私は、アーノルド・ゲゼルを担当した。私は日本にいた当時、日比谷のCIE図書館と愛育研究所でゲゼルの書物は殆ど読んでいたので発表に苦労はしなかったが、大学院学生の中にイエール大学のゲゼル研究所で勉強していた少壮気鋭の学者がいて、心理学の観点からゲゼルに対しては厳しい批判をした。ゲゼルの研究は統計学的に欠陥がある、ゲゼルには心理学の理論がないなど、彼の批判はあたっていているとも思った。しかし小児科医でもあるゲゼルは、乳幼児の臨床経験についてはミネソタ大学のどのスタッフよりも豊富だった。当時日本でも、乳幼児の具体的な発達を語る時にはゲゼルの資料が引用されるのが普通だった。だが、アメリカにいてそのことを考えると、風土も文化も違う日本で、アメリカの研究者の作った資料を引用するよりほかないのは情けないことではないかと私は思った。ゲゼルのような臨床経験を



得るには長い年月を要するが、心理学の検査法を応用して日本の乳幼児の発達の実態を整理するのは簡単なことだから、日本に帰ったらこれだけはすぐにやっておこうと私は考えた。卒業の時期も近づき、私はしばしば日本に帰ってからの研究を考えた。私は紙と鉛筆だけの研究ではなくて、実際の子どもにふれて研究したいと思っていた。社会の冷たい現実に直面して、その現実に温かい心を吹きかけて行くのでなければ、児童心理学の研究とは言えないだろう。セミナーからの帰路、春の快い空気を吸って、闇の中のエルムの並木の間をゆつくりと歩きながら、日本に帰ったら日本の土から芽生える学問に取りつこうと私は自分の胸に言い聞かせた。

### 米国における進歩主義教育の論文

一九五三年春は、私は特別に忙しい日々を過ごしていた。

私は進歩主義教育の歴史を跡づけることによって、遊びが幼児教育の基本であることを歴史的に確認できると考えていた。心理学はそれを更に前進させることができるだろう。私の「進歩主義教育の歴史」の原稿はほぼ出来上がり、所定のオニオンペーパーにタイプで清書するばかりだった。私は自分のタイプライターを持っていなかったで、私が泊まっていたピルグリムファウンデーションのシユタウファー若夫妻は、買いたての新しいタイプライターを私に使わせてくれた。数週間かけてタイプを



全部打ち終わったときには活字が磨滅して全部取り替えなければならなかった。私が新しいタイプライターなのにと恐縮するとシユタウファー夫妻は、だれが使つてもときどき取り替えるのだからと言つて笑つて済ませてくれた。表紙をつけてきちんとしたらとても立派になった。

### ミス・アボット姉妹

四月九日の日曜日の夕、二人の老婦人ミス・アボット (Miss Abbott) 姉妹にサンデーデイナーに招かれた。アボット姉妹は、長年、ミネアポリス幼稚園協会によつて設立されたミス・ウッズ・スクールのセクレタリをしておられた。これは幼稚園と小学校の教師養成のために一八九二年に創立された学校である。スーザン・プロウとパティ・ヒルの進歩主義教育論争のなされていた時代で、新しい幼児教育の推進に一役買つていた。私が米国の進歩主義教育の歴史を論文に書いていることを、大学ナースリースクール主任ミス・ニース・ヘッドリーから聞いて招いてくださったのだった。

たいそう年寄りに見えたが、二人とも六十五歳くらいで、すでに退職して二人きりで暮らしておられた。私に身を寄せるようにして多弁に話された。私は戦後の日本でどうして進歩主義教育に関心を抱いたかを話した。帰りがけに書棚からどれでも好きな書物をあげようと言われ、私はフレーベルの『母の遊戲と愛撫の歌』の一八九五年出



版の英訳本を頂いた。ウイリアム・T・ハリスの序文がついていて、スーザン・ブローの訳で、フレーベルの哲学についてのプロウの解説がついていた。進歩主義教育はフレーベルを否定したのではない。むしろフレーベルの精神にもどって新しい学問によってその先を作ろうとしたのではないか。そんな考えがあつて私はこの本を選び、頂いた。私はその本をいまも大切にしている。ミス・アボット姉妹は、幼稚園運動及び進歩主義教育の時代を身をもって生きてこられた歴史の証人だったのに、私はそのときは自分の論文を書くのに忙しい最中で、多くを尋ねる余裕もなかったことを残念に思う。私がミネソタ大学で勉強していた時は、スキナーの行動心理学はまだ緒についたばかりだったし、ピアジェがミネソタ大学のフラヴェル教授に紹介されて米国に登場したのはそれから十年も後のことである。進歩主義教育のその後についてはこれらの新しく台頭した科学的心理学との関連のもとに続きを語らねばならない。

### 日本からの客

この頃、相次いで日本の有名人の講演会が大学小講堂で行われ、私はトンプソン夫人と聞きに行った。どれも要領を得ない講演で、その人が何を話そうとしている話か分からなくて失望した。言語のハンディキャップもある。日本人の謙遜な話し方も原因になっているかもしれない。私も英語はまずいし、同じ悩みを持っている。それに



しても、原爆にも触れず、平和をも話題にしない、日本人としての意見を聞かれても、着物とすき焼きだけが日本の文化のようなことを答えて、時流に乗るよりほか政治的洞察をもたない。たとえ言葉が下手でもいいから意見だけはしっかりしてもらいたいと、私は生意気なことを考えた。日本人はだれでも日本という小さな社会に縛られている一人の人間にすぎない。日本のなかでは当然のことが世界の光に照らすと通用しないこともあることを私は痛感した。日本の国が貧乏すぎるというの悲劇で、日本のどんな金持ちも、アメリカに來たら金持ちではない時代だった。

この学期は私は大学で日本文化の講義を聴くことになった。英語で「MURASAKISHIKIBU」と言われてもそれが「紫式部」と同一人であると考え至るのには時間がかかった。アメリカ人に日本を伝えるのはなんとむずかしいことか。この講義に触発されて、私は日本について書かれた英語の書物を何冊か読むことができたのは収穫だった。岡倉天心(覚三)の「Awakening of Japan」の『日本の目覚め』の英文は素晴らしい。明治人の英語力はたいしたものである。チャールス・エリオット卿(Sir Charles Eliot)という日本のイギリス大使の著書に『日本の仏教』(Buddhism in Japan)という書物がある。この人は一九三四年に、日本からヨーロッパに帰る途中の船のなかで病死して、シンガポール沖で水葬にされた。この人の大使館付文官として日本にいたのがG・S・サンソム(G.S. Sansom)である。この



人の著書に『西欧世界と日本』(Western World and Japan)がある。私共が学校で学んだ日本の歴史とは違った視点から書かれていて面白かった。しかも日本の歴史と人間に対する愛情が溢れている。このように異なった文化の中でも通用する日本文化論が欲しいと私は思った。

三月十九日に、お茶の水女子大学附属幼稚園の及川先生から手紙を頂いた。「庭の桜の並木は今満開で、実に美しいです。藤棚近くの山の上に山椒が美しく咲いております。緑と桜の美しいなかに可憐なかいどうが赤く可愛く咲き誇っております。先生はいかがお感じ。春はこれからです。ことに人生の春は殊更。」倉橋先生からはときどき短い便りを頂いていたが、及川先生からの手紙ははじめてで懐かしかった。三月二十二日には三月というのにまた吹雪で、せっかく伸びかけてきた木の芽がまたすっ込んでしまわないかと案じた。父からの手紙に「大器晩成」と書いてあった。吹雪の日に『キンダーブック』が届いて嬉しかった。子どもの絵本は日本からの最善の使節である。

### 高校生への講演

この頃私は何度も高校生に話をする機会があった。

ミネアポリスから一五〇マイルほど西のモリスという人口四千人の小さな町の教会



学校で話した。前の晩からハンセンさんという若い牧師の家に泊めていただいた。

シャロンという小学校六年生の女の子と、ブッチュという二年生の男の子、それに三カ月の赤ん坊がいた。シャロンは赤ん坊の世話をよくした。ブッチュは、自分のベットと寝室を私に提供したことが大得意だった。シャロンとブッチュはかわるがわる自分たちの宝物を見せてくれた。野球の選手の写真、飛行機の写真、レコードをお腹の中に備えた人形、卵の殻に自分で絵の具を塗って作った小さな人形などなど、子どもたちとの会話は楽しかった。小さな町にただひとつしかない小さなレストランで、この愛すべき家族と一緒に食事をご馳走になった。何組かの家族たちがハンバーグやホットドッグを食べていた。夕食を終えて、夜のバスで私がミネアポリスに帰るときにはブッチュが泣き出して止まない。シャロンは自分と赤ん坊を日本まで連れて行けという。ひと騒動のすえ、バスの停留所まで家族で送ってきてくれて別れた。個人の友情には国籍も人種もない。(十数年後にシャロンから結婚式の招待状が届いた。私は勿論行かなかったが、しばらくたって美しい花嫁姿の写真が送られてきた。)

二月から三月にかけて私は毎週のように教会の高校生のグループで日本の話を頼まれた。戦争中には互いに敵と思っていた人とも、直接に会って話をすれば同じ人間だとすぐに分かることをテーマとして話した。しかし戦争も敗戦も知らないで、美しい市ミネアポリスで育った幸せな子どもたちにとっては、この前の戦争はもう過去に





なりつつあることを感ぜざるを得なかった。

### マッケンシユタット家

一九五三年三月二十三日には私はネルソン家からマッケンシユタット家に引っ越した。

アール・マッケンシユタット氏は市街外れの大通りにドラッグストアを経営していた。薬剤師の免許を持っていて、長年、ユダヤ人のドラッグストアで働いていたが、十年ほど前からドラッグストアの経営者は薬剤師の免許を取らねばならぬという法律ができて、そのユダヤ人が店を売ってカリフォルニアに移住した。その機会に、長年かかったための金で別のドラッグストアを買って自分が経営者になったのである。マッケンシユタット氏は美しい白髪の、私くらいの背丈の紳士で、正直で、小心なほどに善良な人だった。

マッケンシユタット夫人は典型的な中年アメリカ婦人の体型で、頭のいいしっかりした、そして実のある婦人だった。三人の子どもたちは皆成人して、いまは二人だけで古い家に住んでいた。息子は日本に占領軍の兵隊として来たことがあるとのことだった。私はちょうど卒業間際の多忙を極めていた時期で、始終夜遅く家に帰った。それを夫人は心配して、勉強し過ぎないように、ひとつの体ですべてのことをするこ



とはできないのだから無理しないようにと始終言ってくれた。私が学校から帰ると、いつもベットがきちんとつくられていて、私の婚約者の写真が枕もとにかざってあった。マッケンシュタット氏は従業員を三人も使っていたので、一日おきに夜十時まで店に残って、自分で店を閉めてから家に帰った。帰ってくると私と同じくらいの時間になることが多かった。そういうときは、マッケンシュタット氏は帰りがけによく店からソーダ水とアイスクリームをぶら下げて帰って来た。ソーダの中にアイスクリームを入れて食べるとなかなかおいしい。三人でよもやまの話をしながら夜遅く食べるアイスクリームソーダはなかなかおつなものだった。

マッケンシュタット夫人は私がひと月で次の家に移るのを悲しんで、私が家で食事をするときにはいつも大御馳走を作ってくれた。その頃はアメリカでも家庭料理を作るのを楽しむ人が多かった。日本に帰ったら、あまりいろいろのことに張り切り過ぎてはいけない。殊に最初は家庭を作ることが大事だ。一人の人がすべてのことをできるものではない。公のことは何もしないでいいから家庭を作りなさいと言ってくれた。

数か月後に、私がミネアポリスを発って日本に帰るときには、マッケンシュタット氏は店から荷造り用の箱と縄を持って来て、三日間もかけて荷造りを手伝ってくれた。そういうときはマッケンシュタット氏は実に手際よく、私は大助かりした。